

主観年齢推定における自己若年視要因の検討

—旧知の顔に見られる蓄積記憶の牽引効果—

Examination of the Factor of Younger Identity in Estimation of Subjective Age

-The Effect of Delusions of the Accumulated Memory on a Known Face-

片平建史¹⁾、小西正人¹⁾、飛谷謙介¹⁾、東 泰宏¹⁾、藤澤隆史²⁾、長田典子¹⁾

Kenji KATAHIRA¹⁾, Masato KONISHI¹⁾, Kensuke TOBITANI¹⁾,
Yasuhiro AZUMA¹⁾, Takashi X. FUJISAWA²⁾, Noriko NAGATA¹⁾

E-mail : k.katahira @kwansei.ac.jp

和文要旨

本研究は、人々が顔画像からどのように他者の年齢を判断するかを扱うものである。自己がイメージする自分の年齢を主観年齢と定義し、この生起要因を明らかにするための一連の実験を実施した。主観年齢は、他者の顔画像が自分より年上か年下かを判断する相対的年齢比較課題の評定値が、実際の年齢差に対して示した分布データから求められた。先行研究では、日本人、韓国人および米国人の実験参加者において主観年齢が総じて実年齢より若くなることが確認された。この自己若年視傾向が生起した要因としては、(1) 自己の顔の蓄積記憶による自己顔イメージの若年方向への牽引の要因と、(2) 社会心理的な要因の2つの可能性が考えられた。本研究では、特に(1)の顔の蓄積記憶による牽引の要因について検討するため、旧知(兄弟姉妹)と未知の他者顔の相対的年齢比較課題を実施した。兄弟姉妹については過去に遡って顔の記憶が存在するため、自己と同様に顔の蓄積記憶による牽引が生じると考えられた。結果より、未知の他者顔に比べて、旧知の顔を若年視する傾向が確認された。さらに補足実験では、旧知の顔にかえて年齢の情報のみを提示した場合でも、若年視(未知顔の老年視)が生じることが明らかとなった。これらの結果から、顔の経年変化が記憶として蓄積された結果、年齢イメージが若年方向へ牽引されるという当初の仮説について、より一般的な観点から解釈を試みた。

キーワード：顔画像、主観年齢、実年齢、非線形回帰分析

Keywords : Facial images, Subjective age, Real age, Non-linear Regression Analysis

1. はじめに

コミュニケーション場面において、人は相手の性別や年齢といった様々な属性を顔や声などの情報から推定する。中でも年齢は、相手との関係性を決定するための非常に重要な情報であり、我々は年齢の情報から相手との関係性にふさわしい態度や言葉で接しようとする。ところが、我々はしばしば相手の年齢を実年齢より高く推定し、後になって「もっと年上だと思ったのに…」と意外に感じることもある。

とりわけ顔に基づく年齢推定では、このような他者の年齢の過大視が一般的に見られる。筆者らはこの「他人の顔は年上に見える」傾向が、相手の年齢推定を誤ったのではなく、自己の年齢を実年齢よりも若く知覚しているために引き起こされた現象であると想定し研究を行ってきた。実験対象として(1)日本、そして日本と異なる、もしくは類似した文化圏として(2)米国、(3)韓国の評定者を用いた研究から、人種や国籍を問わず普遍的な自己若年視傾向が存在し、考えうる要因

¹⁾ 関西学院大学大学院理工学研究科、Graduate school of Science and Technology, Kwansei Gakuin University

²⁾ 福井大学子どものこころの発達研究センター、Research Center for Child Mental Development, Fukui University